

未就園児保育活動を通して考える乳幼児期の家庭教育支援（2）

○ 杉 本 裕 子

(鎌倉女子大学短期大学部)

石 塚 麻 実 子

(鎌倉女子大学幼稚部)

1) 研究の目的

本学会第 56 回大会における発表で未就園児の保育活動には a) 2～3 歳児の発達保障 b) 家庭教育支援 c) 家庭教育と幼稚園教育との連携 d) 保育者養成などに一定の役割を果たしうることを論じた。本研究では上記 a)・b) について実践活動の中で提供された支援を検討し、家庭教育支援の要件を考察する。

2) 研究の方法

実践活動からの資料収集と分析

(参考) 実践活動の概要 地域の未就園児親子を幼稚園にて募集。15 組定員、週一日(午前 10 時半～12 時まで活動)のクラスを 3 クラス設置。平成 15 年度は平成 15 年 4 月より平成 16 年 3 月まで各クラス通年 37 回の活動を実施。保育者として幼稚園教諭 2 名、短大教員 1 名、ボランティア実習生各クラスに 8 名前後

3) 実践活動の検討—「a) 2～3 歳児の発達保障」について

気になる子ども RM (3 歳男児) との保育者の関わりの過程を検討していくと、遊び方や保育者に関わり方にある特徴が見られることが明らかとなった。以下その特徴をあげ、それに対し保育者がどう援助しているかを検討する。

① 敵を吸い込み、「出られなく」する。

(登園後、前回一緒に戦隊ごっこをして遊んでいた保育者を探し、見つける。そして保育者が戦隊のアイテムのプレスをしていないことを指摘する。保育者はプレスをつける。) RM はまた敵を吸いこんでしまうしょう油入れを持って「これで敵を吸い取っちゃうんだよ。」と教えてくれる。そして保育者の「じゃあ竜とか猫とエルマーを退治しに行こうよ!」という誘いに「うん。」と素直に応じている。

RM は登園後プレスを作ってから戦隊ごっこをして遊び始める。しょう油さしの武器を持ち、その武器が何でも吸いこんでしまうことを保育者たちに説明する。いで強いという意味では受け入れられていないというそしてそれで敵を吸い込む。そして「ほら敵が出られなくなっちゃった。」と言う。RM は敵が出られなくなることから発展した遊び方がこれまで見られず、保育者は遊びに広がりを持つことのできるようにと RM が関心を寄せている事柄に関連、発展した遊びに誘っている。それに対し、RM は誘いに応じている。

② 「どうする?」と訊ねる。保育者は答えるが、RM はその答えを否定する。

(新聞紙のプールで魚を見つける。かにもいる。そして魚をちぎる。) 「魚けがしちゃったよ。何でかわかる?」と聞く。保育者が「わからな

い。」と答えると「かにに切られちゃったんだよ。」と答える。そして「これじゃあ魚が死んじゃうよ。どうする?」と言うので「ばんそうこうを貼ってあげたら元気になるよ。」と言う。RM は「それじゃあダメだよ。元気にならないよ。」と言う。

RM は保育者に「どうする?」と聞くことが多く見られる。保育者がそれに答えると、「違うよ。」「そんなのダメだよ。」と受け入れない。そして関わりが終わってしまう。そこで保育者は関連した新しい遊びの提案を再度することで、RM とのやりとりを続ける。すると RM は自ら遊びを展開し、遊びに広がりが見られる。このことから、RM の否定的な対応に対し、保育者はそれを受け入れることにとどまらず、遊びを提案していくことが RM 自らが展開していく上で有効であるということが言える。

③ 他人より自分の方がすごいということを示したがる。

(怪獣退治をするために保育者から剣を受け取る。) RM は「これ剣なの?」と保育者に聞く。「そうだよ。」と言うと、「僕は二刀流だ。」と言って剣を2つ奪う。そして両手に1本ずつ剣を持って振り回す。そして「どうしてお友だちは一刀流なの?」と聞く。保育者は「お友だちは1本がいいんじゃない?」と言うと、「どうしてお友だちは一刀流なの?僕は二刀流だから強いんだよ。」と言う。保育者は「そうだね。Rくんは二刀流ですごいね。お友達は一刀流でも強いから一刀流なんじゃない?」と言うが、「でも…」と納得していない様子。

RM は他児と比べて自分の方が持っている数が多いことで強いことを示そうとしている。ここでの「どうして?」は単純な疑問として訊ねているというよりは、自分の強さを表すために使っていると考えられる。このことはよく見られる姿である。保育者は単に RM の言葉を受け入れるだけではなく、他の子どもも1本であつても強いんだよということを伝えており、数の違いがわかる。

● まとめ

気になる子ども RM に丁寧に関わっていくことを通して、本児の遊び方の特徴が何点か明らかとなった。保育者は本児に関わる上で、まさにこれらの特徴において援助の仕方を工夫していることが分かり、そのことが結果的に RM の育ちを支えていると思われる。このような保育者の関わりは、従来の幼児教育・保育の場と同様、家庭教育支援を目的とする未就園児クラスにおいても欠かせないものであるといえよう。また、保

護者が保育の場を共有することによって得る、子どもへの具体的な関わり方に関する示唆は大きいと思われる。しかしそれが保護者の自覚的な成長につながるためには、保護者集団独自の活動が並行して行われている必要があるであろう。

4) 実践活動の検討—「b)家庭教育支援」について

●実践活動より—保護者の様子

対・他児◎関心を持って他児を見ている(例)自分の子と較べる／すぐに手が出る子、聞き分けのない子とみて警戒している／言葉や運動能力、身体的成長の変化などに気づき、その子の親に伝える◎他の子と関わりを持つ(例)アスレチックジムから飛び降りようとしている子どもに気づき、手を差し出して受けとめる

対・他の保護者◎自分からは関わらない(例)挨拶をしない／話の輪の外にいる◎大人同士の関わりだけに気持ちに向いている(例)子どもたちが教師の絵本の読み聞かせなどに集中しているときでも、保護者同士で声高におしゃべりに興じる

対・保育者◎自分からは関わらない(例)挨拶をしない／話しかけると応じるが、自分からは話しかけてこない／欠席の連絡をしない◎具体的な相談事をする◎保育方針・活動への批判、疑問を呈する(例)「朝の集まりをしないのははじめがつかない」「子ども用トイレで遊ばせないために鍵をかけるべき」

対・自分の子ども◎保育者に対する挨拶を指示・要求する(例)「ちゃんと先生のお顔を見て」「ありがとうございまして、は？」◎子どもの行動を細かく指示する・先取りする(例)「こんな遊びがあるわよ、これやってみたら？」◎子どもが自分のそばを離れないでいると苛立った様子を見せる(例)子どもの身体を無理に引き離そうとする／「遊ばないなら帰るよ」◎降園の際、子どもの遊びを突然断ち切る・急かす(例)「帰るよ、早くしないと置いていくよ」◎子どもの行為を厳しく叱責・制止・禁止する(例)遊びの中で子どもが服を汚すと叱る◎子どもの行為をなぞる(例)おもちゃの占有を助ける／子どもと一緒に保育室の隅っこで座ってじっとしている

●保護者の様子から考えられる支援のポイント

- 子どもの成長・発達の理解と見通し
- 子どもと遊ぶ経験・遊ぶ技術
- 個々の子どもに適切な援助の仕方
- 場への主体的な参加の仕方
- 他者との自律的な関係構築
- 保育や子育ての場における自身の役割認識
- 幼児教育はサービス産業であり、保護者が選択的に

利用する(利用している場の保育方針と家庭教育方針とは必ずしも一致しない)という考え方の検討

○他児・他者との相互的な関わりの中で育つことを視野に入れた子育て観

●支援のポイントを組み込み、総合的に展開する保護者集団活動のねらいと活動例

○ねらい：生活の中で子どもの示す特徴・変化・成長をとらえる視点を増やし、子ども理解の幅や深さを広げる

活動例「こどものつぶやき」を採集・お互いに読みあう、個々の子どもについての肯定的な印象・発見などの話を保護者皆でお互いにしあう(ポジティブ・シャワー)、学習会、保育者として参加する

○ねらい：多様な関係状況で遊ぶ(自子と二人で、保育者と三者で、他の親子と一緒に自子と、保護者集団と子ども集団で)経験から遊べる自分を発見・開発する

活動例子どもの求めに応じて遊びに加わる、親子遊びのプログラム(「お母さんと一緒に遊ぼう」)に参加する、保育者として参加する

○ねらい：保育内容の理解、年齢にふさわしい遊具・教材の知識、身近なもので作る工夫、子どもの遊びのテーマは何かの認識的理解、子どもに添った具体的な関わりの手がかりなどを得る

活動例遊具製作、通信での保育内容の解説、教材の紹介、通常の保育活動に対する感想を述べ話し合う、保育者として参加する

○ねらい：子どもを中心にした集団活動の企画を通し、年齢にふさわしいテーマの選択と活動内容の構成、表演の実践、他の保護者との協働、自子のみでなく他児と共にある子ども集団全体を捉える力をつける

活動例お母さん劇場の計画・準備・上演、通常の保育活動に対する感想を述べ話し合う、保育者として参加する

●まとめ

保護者への支援のポイントは保育の場を共有することで保育者に明らかになり、保護者どうしても保育の場への参加経験を共有している。上記の保護者集団活動は、子どもの保育活動と並行して行われていく必要がある。

5) 考察と今後の課題

以上の検討から、子どもの保育活動と、保護者集団活動の双方が相互に関連しつつ展開されることが、家庭教育支援の要件のひとつと考えられる。そこにおいて子どもへの支援と保護者への支援がどのように統合されて、親子が共に育つ家庭教育支援となっていくのかを今後の実践研究で明らかにしたい。